第十一次日華(台)親善友好慰霊訪問の旅　帰朝報告

期間　平成二十一年十一月二十二日（日）～二十六日（木）
参加者　三十名

■　十一月二十二日（日）

『産經新聞記者が同行』

今次訪問団員三十名のうち、福岡出発の二十五名は、七時五十分福岡空港国際線出発ロビーに集合し、出国手続きを終えた後、ＶＩＰルームで簡単な出発式を行いました。参加者全員が簡単な自己紹介をしましたが、今回の訪問団には産經新聞九州総局の力武崇樹記者も同行されました。ＮＨＫの偏向報道と異なり、日本と台湾の真実の関係をつぶさに取材してもらい、正しく報道してもらえるという、団員全員の熱い期待が感じられました。出発式を終えると、記念写真撮影を行い、連休の中日で大変混み合う中、定刻より少しおくれて十時十五分にチャイナエアライン百十一便にて、空路台湾を目指して福岡空港を出発しました。いつもの様に機内食を美味しくいただき、寛いでいるうちに台北上空に到着し、十一時四十分（現地時間）に桃園国際空港に着陸しました。入国手続きを済ませて空港の待合室に着くと、今回が四度目のガイドですっかり顔馴染みの簡添宗さんと四泊五日の全行程をＤＶＤに録画してもらう蔡國恵さんと助手の方が暖かく出迎えて下さいました。十二時四十分到着予定の成田出発の団員五名を待っている間に、記念品や資料を配布し、意思統一を図って打ち解け合っているうちに、五名の皆さんが到着しました。一時間到着が遅れたために、挨拶もそこそこに専用バスに乗り込んで桃園駅へと向い、十四時二十八分発新幹線にギリギリ間に合い胸を撫でおろしました。

桃園空港に降り立った時は雨が降っていたのですが、新幹線で南下するに従って天気は回復し、台中あたりでは晴れ間がのぞき、終点の左營駅に着いた時にはすっかり晴れていて、幸先の良い旅のスタートとなりました。左營駅では、馴染みの林溪和さんが私達を笑顔で迎えて下さり、二十四日の夕食会まで同行してもらいました。

『初めての外国人参加』

専用バスに乗り換えた一行は、最初の訪問地保安堂へ向かいました。保安堂に着く

と趙麗恵さんをはじめ近所の皆さん三十数名の方々が出迎えて下さいました。日本から持参したお土産をお渡ししましたが、その中に紅茶がありました。これはスリランカ出身のウィクラマスレンドラサニー氏が、台湾の皆さんにと本国から取り寄られた百箱の一部です。今回サニー氏は、イギリスによるスリランカの植民地支配と日本の台湾統治の違いを実際に自分の目で確かめたいと参加され、両者が全く異質のものであることに驚嘆されました。十一回の訪問の中で始めての外国人のご参加で、慰霊訪問団も国際的になってきました。

一年振りの再会を喜び合った後、班毎に整列し、国旗敬礼、国歌斉唱、「海ゆかば」に合せて日本軍艦の艦長の御霊の平安を祈って黙祷を捧げ、団長が代表して献花し、無事慰霊式を斎行しました。団員一人ひとりがお線香を上げて回向し、用意してあったバナナやポンカン、パイナップルケーキ等をご馳走になりながら、思い出話に花を咲かせました。今年もぜんざいが用意してあり、皆で美味しくいただいた後、建設中の新しい堂に案内してもらいました。建築途中とはいえ、威風堂々たる建物で、彫り物が施された柱も立派なものでした。来年完成予定だそうで、今から来年の訪問が楽しみでなりません。

『夜空にはっきりと南十字星』

日が暮れた十七時四十分に、名残りを惜しみつつ、皆さんと来年の再会を約して、バスは墾丁へ向けて南下しました。日がとっぷりと暮れていましたので、周囲の景色は眺めることができませんでしたが、一時間半程走って、墾丁のホテルに到着しました。バスを降りて玄関に入る前に、夜空を見上げると南十字星がはっきりと見え、歓声が起こりました。今もあの白い輝きは眼に焼きついています。ホテルは海岸線のすぐそばにあり、強い潮風が窓を開けると吹き込み、心地よい涼しさを演出してくれました。ホテル内のレストラン「灯台餐庁」で、訪問団顧問の谷尾侃氏からお話をいただいた後、全員で台湾料理をいただきました。初対面の方も多い中、和気合々と夕食は進み、二十一時十五分のお開きの時にはすっかり打ち解けていました。部屋に戻ると、旅の疲れも手伝って、ぐっすりと眠りました。

■　十一月二十三日（月）

ホテルで朝食を摂った後、一行は台湾の最南端の鵝鑾鼻岬へと向かいました。広い鵝鑾鼻公園の一角に展望台があり、そこに登ると巴士海峡が一望できました。天気が良かったのでかなり遠くまで見渡すことができましたが、大東亜戦争の末期、アメリ

カの潜水艦に撃沈され、多くの同胞が海のもくずと消えていかれたことに思いを馳せると目頭が熱くなり、犠牲者のご冥福を心から祈りました。その後よく整備された園内を散策し、最後に灯台付近で記念写真をとって公園を後にしました。

『ご遺族が潮音寺で献花』

バスで二十五分ほど北上すると、巴士海峡で犠牲となられた方々を手厚く祀ってある潮音寺に着きました。境内の一角に「第二次世界大戦日本海軍巴士海峡戦没者慰霊碑」があり、早速碑の前に整列して、国旗敬礼・国歌斉唱に続いて黙祷を捧げ、巴士海峡でお父様を亡くされた前原清美氏が団員を代表して献花をされました。訪問地に直接関係があるご遺族が参加されたのは、今回が初めてでした。全員で焼香をした後、本堂の展示品等を見て回りましたが、潮音寺の建立に尽力された訪問団の森顧問（平成十七年他界）の名前が石碑に刻まれているのを見て、改めて顧問のご苦労、ご遺志に感謝の思いを強くしました。

お寺の管理をされている地元の女性にお礼を述べて潮音寺を出発した一行は、巴士海峡に流れ込む川の橋の上で、ご英霊に黙祷を捧げ、先程献花された前原氏が川にお花を投下して、ご冥福をお祈りしました。

『奇美実業の許文龍会長と再会』

橋上での慰霊式を終えた一行は、一路台南を目指してバスを走らせました。台南にある奇美博物館に到着すると、毎年博物館を案内して下さる龔素娥さんが待っておられました。一年振りの再会を喜んだ後、社員食堂に案内されると昼食の弁当が用意されており、郭玲玲館長と石榮堯顧問も同席されて昼食会となりました。実は石榮堯氏は手術をされて療養中と聞き及んでいただけに、元気なお姿に安心しました。食事の後、石氏と龔さんの案内で館内を見学していたところ、エレベーターの扉が開いて五～六名の方が出てこられて、突然「小菅さん、小菅さん」と団長を呼ぶ声が聞こえました。何事かと目をこらすと、何と奇美実業グループの許文龍会長がわざわざ訪問団に会いに来られたのでした。短い挨拶を交わしただけですが、訪問団のことを気にかけていただいているのが判り、感動しました。館内を隈なく見学し終わると中庭で記念写真を撮って、お暇乞いしました。

『恩賜の煙草をご祭神に』

次の訪問地は同じく台南にある飛虎将軍廟です。廟に着くと恒例の歓迎の爆竹が鳴らされ、呉金魁さんをはじめ廟を守っておられる地元の方々の熱烈歓迎を受けました。

ご霊前に干支の置物や恩賜の煙草をお供えした後、国旗敬礼、国歌斉唱、黙祷、献花に続いて、最後に小菅団長がいつまでも廟を守ってこられた地元の方々へ感謝の挨拶をして慰霊式を終えました。各自お線香を上げた後、廟内を見学し、バナナやジュースの歓待を受けながら談笑して時を過ごしました。最後に地元の方々も加わって記念写真を撮り、強烈な爆竹の音に送られながら、来年の再会を約して廟を去りました。

一行は台南から高雄へと戻り、訪問団事務局の黄楷棻のご両親である黄明山・葉美麗ご夫妻主催の歓迎夕食会に臨みました。まるで結婚披露宴かと見まごうような立派なレストランで、台湾支部長である黄明山氏の歓迎の挨拶と小菅団長の答礼を黄楷棻がそれぞれ通訳することから会は始まりました。続いて宴会になりましたが、二日目ということで団員同士もすっかり打ち解けており、また身内や友人の方も多く招待されていましたので、大いに盛り上がり、時の経つのも忘れてしまいました。名残りを惜しみつつ黄・葉ご夫妻に感謝して歓迎会はお開きとなりました。

ホテルに戻る前に、一行は台湾名物の夜市見学に出かけました。高雄の有名な六合夜市です。商店の店先に、衣料品やバッグ、時計などが所狭しと並べてあり、また珍しい食べ物やフルーツを売る店が軒を連ね、何度見ても楽しい光景です。毎晩深夜まで開かれていて、台湾の原動力の淵源はこういうところにあるのではないかと思いました。

■　十一月二十四日（火）

『嘉南農田水利会会長がお出迎え』

三日目の最初の訪問先は烏山頭ダムです。八田與一夫妻のお墓に到着すると、周囲が昨年よりも整備されているのに気づきました。八田技師の偉業が台湾のみならず日本国内でも評価が高まってきていることの現れではないかと嬉しく感じました。ダム建設にかける技師の意気込みを描いたアニメ「パッテンライ」の上映も一役買ったのではないかと思われます。墓前にお花を供え、全員でお線香を上げて回向した後、八田與一記念館に行きました。そこでは地元の嘉南農田水利会の徐金錫会長が私達を待っていて下さいました。記念館で八田技師紹介のビデオを見ましたが、その中で若き日の氏が出演されており、技師への尊敬の強さを目のあたりにすることができました。記念館を出ると、昨年偶然発見した殉工碑を訪れました。現地の人と日本人とを分け隔てなく名を刻んだ碑の前で、献花・黙祷をして犠牲者の霊を慰めました。

『台南縣政府の縣長もご参加』

烏山頭水庫を後にした一行は、新榮へと向い、「小園日本料理店」で何怡涵・陳清華ご夫妻と一年振りの再会を喜び合いました。日本風の料理を取り入れたお店で、中華料理に飽きているのではと慮っての粋な計らいだろうと想像に難くありません。

会場には、台南縣政府の蘇煥智縣長と台湾李登輝友之会の黄崑虎総会長もお見えになっていて、何・陳さんの歓迎の挨拶、団長の答礼に続いて、お二人からも挨拶がありました。宴会が始まるとあちこちのテーブルで話が弾み、スケジュールにはなかったのですが、急遽ご夫妻の家と黄総会長の家に立ち寄ることになりました。盛り上がりを見せた歓迎会も、来年元気な姿で再会できることを約して、二時間半の幕を閉じました。

会場を後にした一行は、すぐ近くにある何・陳さんのお宅を拝見に伺いました。時間の都合で内には入りませんでしたが、瀟洒な洋風の邸宅で、表札にお二人の名前が並記してあるのが印象的でした。

『感動的だった子供達の歓迎』

予定よりも小一時間遅れて鹽水國民小學に到着すると、既に子供達が待っていてくれました。そして正門前でまず高学年の生徒達が躍動的な龍の舞を踊ってくれました。その見事な舞に感動していると、この日のために三ヶ月も前から練習を積んでいたと聞いて、遅れたことを本当に申し訳なく思いました。続いて低学年による太鼓の演奏、幼稚園児によるタンバリンの演奏と、心尽くしの歓迎を受けて目頭が熱くなりました。子供達から素敵な歓迎を受けた後、資料館で劉信卿校長から学校紹介があり、その後校内にある神社に団長・副団長を先頭に二列縦隊で整列し、二礼二拍一礼の作法で参拝しました。祈願の木札が用意されてましたので、各自願い事を書いて奉納しました。

『古跡を特別見学』

子供達に見送られて学校を後にしたバスは、貞愛親王殿下がご宿泊された「八角樓」を見学した後、後壁村にある黄総会長のお宅へと向かいました。敷地が数万坪もあるという古跡（文化財）で、殆んど手を加えられることなく建てられた当時のままで保存してあるそうです。ここには李登輝元総統が訪ねられたり、外国の要人が総統府に行く前に立ち寄るといった逸話には驚きました。三十分程見学した後、バスは台中を目指して北上しました。

この日の夕食は、台湾台日海交会主催による歓迎会で、会場の福華大飯店に予定よりも一時間近く遅れて到着したにもかかわらず、出席者の皆様は待っていて下さり、

温かく出迎えて下さいました。林徳華会長の挨拶に続いて小菅団長が、まず到着の遅れを心からお詫びした後挨拶をして、歓迎会は幕開けとなりました。顔と名前が必ずしも一致しない中、顔見知りの方も大勢おられて、あちこちのテーブルでお酒を酌み交して歓談の輪が広がってゆきました。団員の何人もがカラオケを歌い、以前好評（？）だった金澤副団長の女形の踊りも登場し、大いに盛り上がりました。明日の宝覺寺での再会を約し、団長の締めの言葉で宴はお開きとなりました。ホテルに着くと心地よい酔いも手伝って、ぐっすりと眠りました。

■　十一月二十五日（水）

『大好評だった団長の祭文』

ホテルを八時前に出発した一行は、慰霊訪問の最大の目的である「原台湾人元日本兵軍人軍属戦没者大慰霊祭」に参列する為、宝覚寺へ向いました。宝覚寺に到着すると、まず境内の一隅にある日本人遺骨安置所（日本人墓地）の前で、日本人の物故者一万四千余柱に慰霊の誠を尽くすため、慰霊式を斎行しました。国旗敬礼、国歌斉唱、黙祷に続いて団長が墓前に献花し、団員全員がお線香を上げて御霊の平安をお祈りしました。

続いて「霊安故郷」の碑の前の慰霊祭会場へ移動し、参列しました。昨年同様参列者の減少が目を引き、我々訪問団が最大でした。日台両国国歌の斉唱、海軍旗掲揚、黙祷、林徳華会長の主催者挨拶に続いて、各団体の代表者による献花・祭文奏上が行われました。中でも小菅団長の祭文は、軍人勅諭、教育勅語の引用から始まり、日本と台湾の歴史的検証を経た上で、大東亜戦争の意義にまで踏み込んだ内容で、格調高く好評で、団員の全員からぜひ祭文が欲しいと強い要望が寄せられた程です。

祭典終了後、境内の布袋様の像などを見学した後、孔子廟に立ち寄って、昼食会場の台中担仔麺へ向かいました。昼食は中日海交協会主催の歓迎昼食会で、会員やご家族三十名位の方が集まっておられました。胡順來会長の歓迎の挨拶に続いて小菅団長が答礼を述べ開宴となり、家族連れが多いせいもあって非常に和やかな雰囲気で進みました。高齢者が多い中、家族ぐるみで付き合いが続くと継承性が維持でき安心だと感じました。話が弾んで名残り惜しい中、来年の再会を約して次の訪問地濟化宮へと向かいました。

『濟化宮に歓迎の電光掲示板』

新竹にある濟化宮に到着すると、山門の電光掲示板が目につきました。昨年までは

なかったもので、「訪問団歓迎」の文字が目を引きました。昨年同様謝鏡清董事長らが出迎えて下さり、早速本堂へ向かいましたが、昨年改築中だった建物も完成して、荘厳さが更に増したようです。今年は参拝前に金澤副団長が祓詞を朗々と奏上され、立派にお役目を果たされました。続いて団長が献花をし、団長に合わせて全員が二礼二拍一礼で参拝しました。謝董事長から由来等の説明を受けた後、靖國神社から分祀された四万を超える霊璽が安置されている建物内を畏敬の念をもって拝見しました。社務所に戻るといつもの餅とお茶が用意されており、日本のきな粉餅を想像しながら、おいしくいただきました。一服した後濟化宮の皆さんと一緒に記念写真を撮り、来年の再会を約して山門を後にしました。

台北に着いた一行はホテルに荷物を降ろした後、初日の夕食に続いて二回目の団員のみの夕食会及び団長夫人の誕生会を華渓大飯店で行いました。ＪＴＢの大西さんの粋な計らいでバースデーケーキが用意され、？歳を迎えた団長夫人のお礼の後、小分けされたケーキを全員で美味しくいただきました。夕食会終了後夜市見学希望者とそうでない方とに分れ、希望者十数人は士林の夜市をそぞろ歩きした後、ホテルに戻りました。

■　十一月二十六日（木）

『覆いが取り除かれた記念碑』

旅行最終日のこの日は、まず烏来の高砂義勇隊戦没英霊記念碑を訪れました。先の大東亜戦争で勇猛果敢に戦い散華された高砂義勇隊を顕彰する碑の台座は、昨年迄は竹で覆われていました。しかし、今年は竹がきれいに取り払われ、碑文がはっきりと読める状態になっており、事ある毎に覆いを取り払うように主張してきた我々の願いが叶い、溜飲の下がる思いでした。心から晴々とした気分で、国旗敬礼、国歌斉唱、黙祷、献花の一連の慰霊式を斎行しました。続いての挨拶は、従来高砂義勇隊記念協会の簡福源理事長がされておられたのですが、昨年他界されたため、今回は周萬吉理事長代理がされました。昨年涙ながらに日本の方に申し訳ないと語られていたお姿が偲ばれてなりません。少しずつ公園を整備してゆくという協会の皆さんの決意が、何ものにも優るご供養だと思います。

慰霊式を終えた一行は、途中土産物店に立ち寄り、壮大な瀑布を見学した後、時間の関係で名物のトロッコ列車には乗らず、大急ぎでバスで台北へ戻りました。

『三十分遅れての表敬訪問』

実は、十一時に中華民國外交部（外務省）を表敬訪問する予定になっていたのですが、台北市内の渋滞等もあって、三十分遅れの十一時三十分に外交部に到着しました。事前に遅れを電話で連絡していたので、大きな混乱はありませんでしたが、先方に失礼と汗顔の至りです。

広い会議室に案内された一行は、そこで名刺交換をして席に着きました。昨年の蔡明耀亜東関係協会秘書長に代わって今年は粘信士副秘書長が接待して下さり、大阪勤務が長くて自分の日本語は関西訛りが強いとユーモアを交えて自己紹介された後、日台関係の重要性、普遍性を説明されました。昨年迄はこの後質疑応答がなされていたのですが、今年は次の行程が迫っていて割愛し、玄関前で粘氏を交えて記念写真を撮り、外交部を後にしました。

昼食は台日文化経済協会主催の歓迎昼食会で、外交部のすぐ近くの逸郷園に会場が設けられていました。会場のテーブルには団員一人ひとりの名前を書いた席札が置いてあり、行き届いた配慮に感心しました。今年は会長が方仁恵氏から鄭祺燿氏に替わられましたが、従前と変わらぬ温かいもてなしでした。黄天麟副会長、呂昌平秘書長や黄呈芳顧問等も同席され、更に外交部から昨年同様洪英傑秘書回部辦事もお見えになりました。

会長が全国各地から訪問団に参加される方がいるのは大変喜ばしいと、訪問団の裾野の広がりを期待される挨拶をされました。団長の答礼の後会食が始まり、台湾ビールと紹興酒で差しつ差されつされながら、台湾での最後の食事を楽しみました。一年振りの再会ということで話は尽きませんでしたが、二時間程歓談して、お店を後にしました。

『全員が無事帰国』

途中免税店に立ち寄って最後のショッピングを楽しんだ後、桃園国際空港へと向かいました。空港では五日間お世話になったガイドの簡さんとカメラマンの蔡さんにお礼を述べ、来年の再会を約して出国手続に移りました。成田に向かう五名の団員ともここで別れ、福岡行きの二十五名は、十七時四十五分にチャイナエアライン百十便で台北を飛び発ち、二十時五十分（日本時間）、福岡空港に着陸しました。入国手続きを済ませた一行は、空港ロビーで簡単な解散式を行い、全員の無事の帰国と台湾の皆様方の心温まるおもてなしに感謝しつつ、沢山のお土産と思い出を抱えて家路につきました。

（文責　原田和典）